2025 年 3 月 23 日　四旬節第 3 主日　ルカ 13: 1～ 9　　「悔い改めなさい」

今から三十年前 1995 年 3 月 20 日に「地下鉄サリン事件」という、無差別殺人犯罪が行われました。オウム真理教というカルト集団が、教祖麻原彰晃の命令を受けて、猛毒の化学兵器を、朝の通勤時間帯に走る、満員の地下鉄車輌の中に撒きました。あの混乱した光景を、今も忘れる事はありません。

これまで地震や津波など自然災害で、多くの人たちが被害に遭う、悲惨な光景を幾度も見て来ました。けれどそれとはまったく違う「人間の悪意」を強く感じ取りました。

<ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。>

この個所にも同じ「人間の悪意」を強く感じて、やりきれない思いです。ピラトはガリラヤ人たちを犠牲の羊のように殺しました。

新約聖書の中でこの「ガリラヤ人」という言葉は、４回出て来ます。先程のルカ.13:1 そして 13: 2 <イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。>

Acts 2:7＜人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。>

この　「ガリラヤ人（Γαλιλαίοι）＝ガリライオイ」という言葉には、特別の意味がこめられています。

また旧約聖書では、預言者イザヤは８章２３節で言います。

＜先に　ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが　後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた　異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。＞

　これまでガリラヤは異邦人の地として蔑まれて来ました。それは「ガリラヤ」という地名が現れるルカによる福音書の以下の個所から明らかになります。

Luke 23:5＜しかし彼らは、「この男はガリラヤから始めてこの都に至るまで、ユダヤ全土で教えながら、民衆を扇動しているのです」と言い張った。＞

　ガリラヤのナザレから出たイエスさまを、祭司長たちと興奮した大勢の人たちは、ヘロデにこう訴えて、殺そうとします。彼らエルサレム神殿の権威を頼む人たちにとって、ガリラヤのイエスは神殿破壊者です。そして後に同じルカの記した使徒言行録にもガリラヤが現れます。

Acts 5:37 ＜その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた。＞

　ガリラヤ人という呼び名に関しては、高橋 博厚氏が関西学院大学神学研究会の発行する機関誌『神学研究』2014 に興味深い論文を掲載しています。

『「ガリラヤ人」という呼称に関する考察

　：ヨセフスとユリアヌスを中心に』

この中で高橋は

＜このような様々なキリスト教徒への呼び名がある中で、4 世紀に異教復興を目指したローマ皇帝ユリアヌス（在位 361 年 363 年）によるものはとりわけ印象的である。彼は、 キ

リスト教徒に対して、 すべてと言っていいほど「 キリスト教（Χρ ι σ τ ι α ν οί)」の名で呼ぶことはなく (2)、その代わりに「ガリラヤ（Γ α λ ι λ αί ο ι)」という奇妙な呼称を用いていた。彼が「ガリラヤ人」と呼んだのには、間違いなく侮蔑的な意図があるだろう。＞p79

と分析しています。同じように「ナザレ人」もキリスト者を意味します。この論文は現在インターネットで閲覧が出来ます。

権力者にとってイエスさまは、いつも目障りな存在です。

権力者は孤独です。神を神として崇めず、人を人と認めません。独裁者にとって、世界に存在する価値があるのは、自分１人です。世界は今確かに、独裁者たちにより滅びに向かって歩んでいます。この動きを止めるために、私たちは愛を持って立ち上がり、戦わねばなりません。

３０年前の地下鉄サリン事件の時に、聖路加国際病院では、普段の病院業務を即座に停止して、緊急事態に対応しました。救急車だけでなく、事件現場の近くを通りかかった自家用車が、倒れる人たちを運び込んで来ました。聖路加病院にあるチャペルも、緊急病床として使われ、病院からは医師１０人が現場に駆けつけました。

ルカ福音書１０章にある善いサマリア人のたとえそのままの介抱が、３０年前に東京・築地で聖ルカの名を戴く病院で、実際に行われたのです。これは現代の奇跡です。

＜救急車がどんどん来て、2 時間くらいの間に 640 人の患者のトリアージを行い、重症と中等症と軽症とに分け、病院のどこへ入れるかを決めました。心肺停止の１人は手の施しよう

がありませんでした。そのほかに呼吸停止の人が 2 人いました。来院した 640 人のうち，入院時呼吸停止だった 1 人が 1 か月後に亡くなりましたが、入院した 111 人のほとんどが、翌日あるいは 3 日目くらいまでに退院しました。＞（「地下鉄サリン事件における聖路加国際病院の対応と災害医療への提言ー日野原重明氏（聖路加国際病院理事長）に聞く」）医学界新聞 2005

イエスさまに従う私たちにとって、苦しむ人たちが「何人」であるのかはまったく意味がありません。すべての人が持ついのちは救われるべきいのちです。

その人が成功している者かどうか。利益をもたらす者かどうかも、選別の原因にはなりません。先程の日野原先生の言葉にあった、トリアージとは、大事故や大災害で災害医療が必要となった時に、「誰から運んで、誰から治療をするか」を見極める作業です。フランス語で選別を意味します。

トリアージでは患者は四種類に分けられて、黒・赤・黄・緑の、タグが右手首に付けられます。判断する医療者は、この時冷静に医療的な目で、患者を見極めます。

けれど神さまが私たちを選ばれる時は、いつも私たちが神さまに真っ直ぐ向き合っているかを問われます。「悔い改める」とは、神さまに向かい向き直る事です。毎日私たちは迷いながら生きています。様々な恐れや、色々な欲望が私たちの心を迷わせます。

神さまの他に、正しい方はいません。私たちはいつも自分の罪と向き合い、神の愛に満たされながら、この四旬節を悔い改めて過ごしましょう。